

I 発掘調査に至る経緯

大井町は、首都圏30km圏内の県西南部に位置し、畑作を中心とする純農村地帯であったが、昭和40年代のいわゆる地域開発ブームの渦中に、本町もさらされ、武蔵野の雑木林が研究所に、畑地が宅地へと化していった。

町が基本構想の理念としている“ひとりひとりの人間を大切にするまちづくり”を、まちづくりの基本とし、だれもが住んでよかったといえる誇りあるふるさとづくりを成し遂げていく上で、町のもっている歴史的・伝統的基盤を正しく継承していくことは必要であり、不可欠のものである。町づくりは、地域の歴史を十分に学び、それを更に発展、推進していくことが望まれているが、この点にも、埋蔵文化財の発掘調査・保存・活用が、大いに貢献していくことも必要であろう。

現在、大井町に40ヶ所ちかくの埋蔵文化財包蔵地が確認されているが、これらは、すでに人々から忘れられ眠っているが、これらの遺跡は地域の愁久な歴史を語る私たちの財産であり、学校教育の大切な教材として、また、身近の歴史として、地域の発展過程をうつし出してくれている。

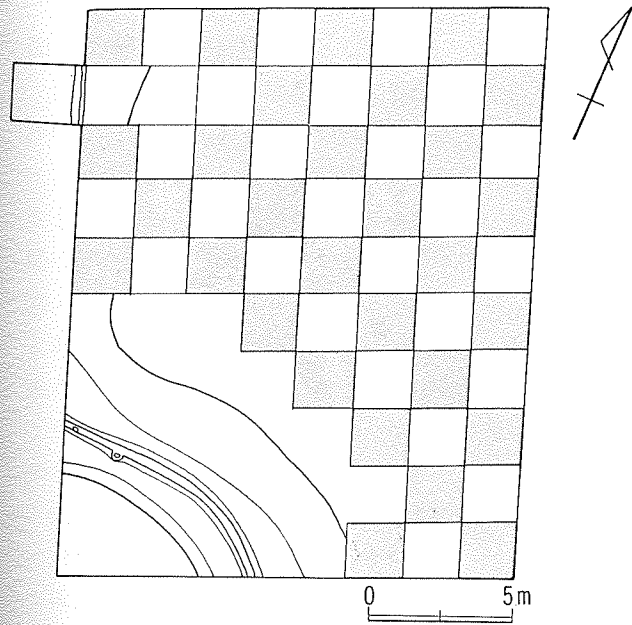
本町では、埋蔵文化財保護の観点から、中小の開発行為に対処するために、昭和53年度から、第一次5ヶ年計画で、国庫及び県費補助による事業とし、遺跡の発掘調査を実施してきた。東部遺跡群の今年度の発掘調査の実施した遺跡名、所在地、原因者、面積、調査期間は下表のとおりである。

今回の5ヶ所の調査の原因は宅地建設2件、農地の天地返し3件で、調査総面積2,383㎡である。

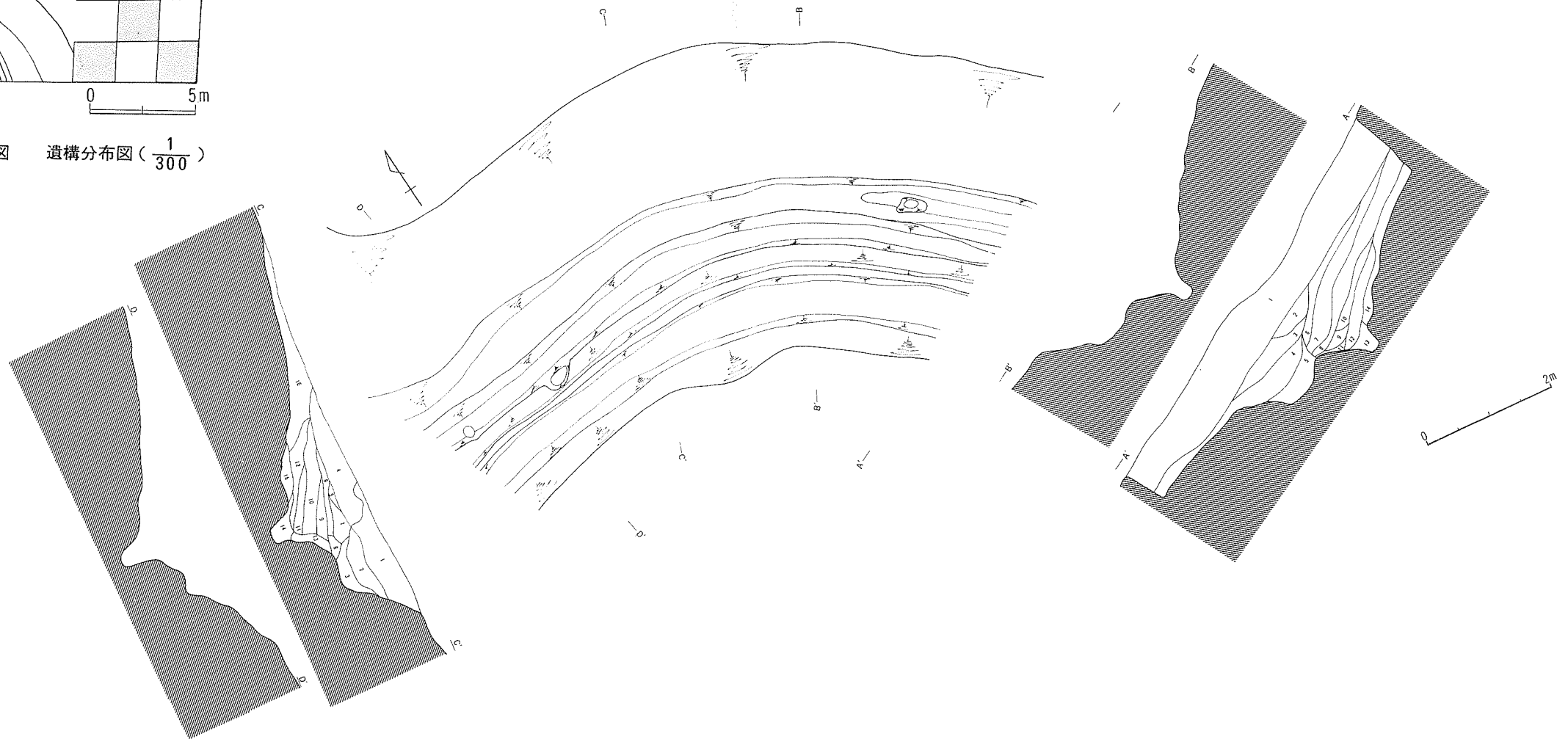
埋蔵文化財包蔵地における本町のような蚕食的開発状況は、憂慮すべき事態にあり、遺跡を総合的に把握することや遺跡そのものの価値が失われる危機にある。しかしながら、小面積の記録保存の調査の成果を十分に活用し蓄積させていく努力も同時に不可欠である。新興住宅地として変貌した大井町に住む住民が大井がふるさとであるためには、豊かな自然環境の保存と共に歴史的環境の保存、それは、大井町の歴史を形成してきた各種の埋蔵文化財の保存と活用を、これからの都市計画(町づくり)に位置づけていくことが求められてくるであろう。

No.	遺 跡 名	所 在 地	原 因 者	面 積	調 査 期 間
1	苗間東久保遺跡 第 7 地 点	大井町苗間字東久保 573-3	長 澤 徹 郎	396㎡	4月1日～4月3日
2	西ノ原遺跡 第 9 地 点	〃 苗間字西ノ原 93-1 98-1	堀 井 照 夫	600㎡	6月1日～6月23日
3	西ノ原遺跡 第 10 地 点	〃 苗間字西ノ原 180-2	安 野 祐 司	400㎡	11月4日～11月13日
4	東久保南遺跡 第 1 地 点	〃 亀久保字東久保 547	堀 井 弥 作	320㎡	11月24日～12月14日
5	東 台 遺 跡 第 2 地 点	〃 大井字東台 640-7	内 田 友 次	667㎡	12月14日～2月13日

VI 東久保南遺跡第1地点



第14図 遺構分布図 ($\frac{1}{300}$)



第15図 溝状遺構 ($\frac{1}{60}$)

VI 東久保南遺跡第1地点

調査の経過と概要

東久保南遺跡は、今回が初めての鋤入れである。遺跡は富士見市境界を流れるさかい川による浅い谷の北側に位置している。縄文土器、土師器、須恵器の破片が散布しているが、広範囲にわたっていない。遺跡のすぐ南には「オトカ山」が存在する。行政では富士見市域にはいるが、「埼玉県遺跡地名表」では古墳としてあつまっているヤマである。この「オトカ山」については、大正年間に記述された『大井村郷土史』に「本村ノ稍中央部里俗狐山トヨブ塚ヨリ、石器・土器<中略>其ノ中ニ馬ノ脚部ニ似タル者アリトイヘドモ、是ヲ以テ直ニ埴輪ト為スハ少シ早計タルニ似タリ」とある。他の文献には記載はないが土地の人の話しからも、いろいろと塚にまつわる伝説的な話はあるが、オトカ山そのものについては確実な事実がつかまれていない状況である。

ちょうど、オトカ山の北側の大井町域の畑地を天地返しをするという連絡をうけ、さっそく発掘調査にはいった。調査区域は「オトカ山」の真北で、盛土の裾から約5mはなれた地点である。

発掘調査は、2×2mのグリッドを設定し、市松模様掘り進んだ。その結果、調査区の南西部に黒色の中位の広い帯状の掘り込みを確認した。また調査区の西側にも、南北に走る帯状の掘り込みも確認された。

遺構と遺物

溝状遺構(第15図)

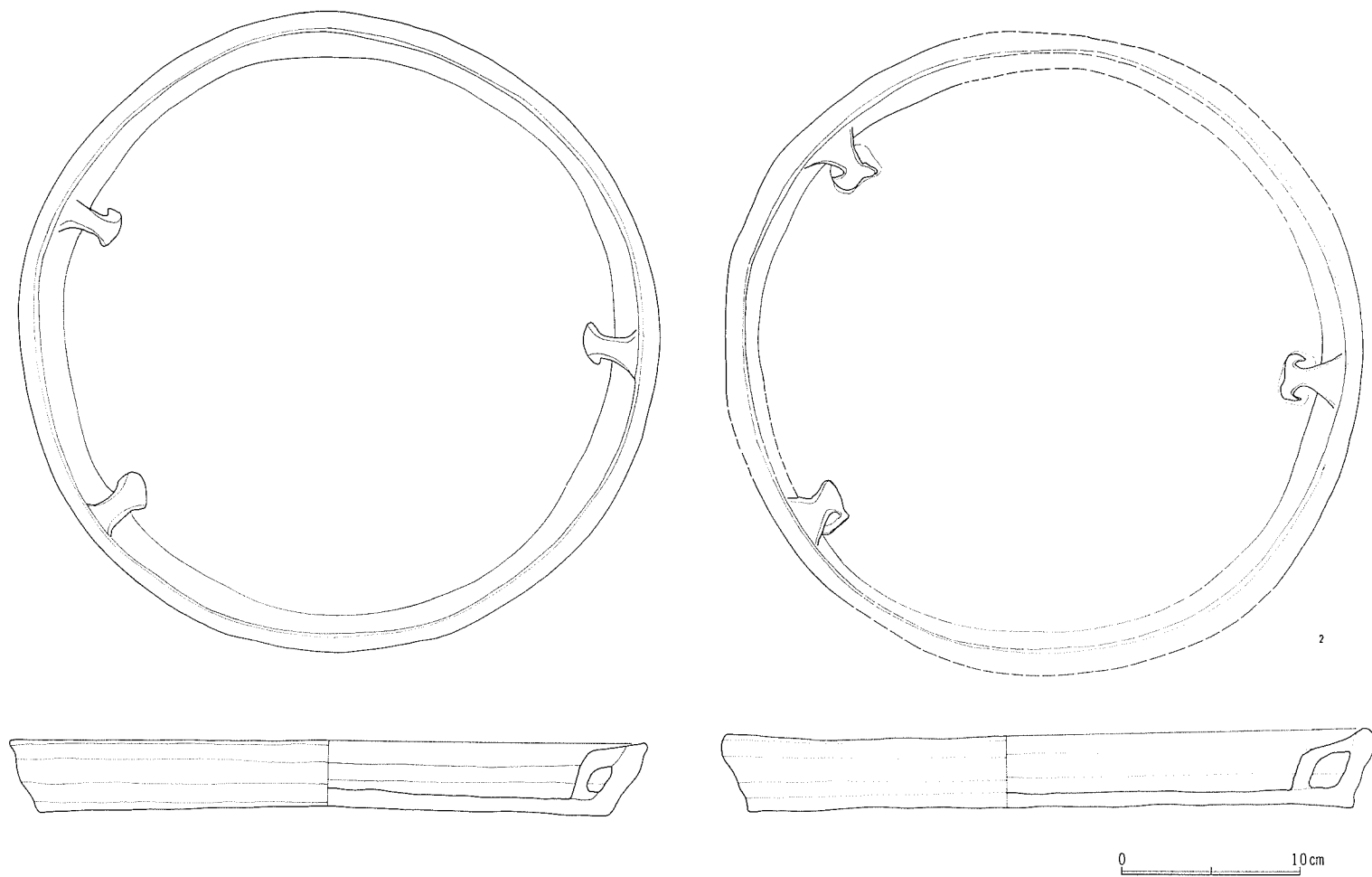
上部幅450~510cm、中段幅260~290cm、溝底幅30~35cm、深さ220cm(現地表面起測)、170cm(ローム面起測)の規模をもつ溝状遺構を確認。断面は北側の壁は傾斜角20°でほぼなめらかに立ち上がるが、南側の壁は中段で段をもち立ちあがる。溝底付近で段をもち、深さ30cmを更に溝状に掘っている。

覆土は、南側の中段を底とする掘り込みがあることを如実に示している。1~3層は2本目の溝状遺構の覆土と思われる。全体的に軟質の黒色土でしまりがなくボソボソしている。特に2層はなげこまれた状態の遺物を多量に含んでいる。4~9層は砂っぽい褐色土層で下位にむかうにしたがって色調は明るくなっていく。10~12層はしまりのある暗褐色土で下位の方がしまってくる。14層はねばりの強い、ローム粒子を含む褐色土層。

溝状遺構は全体として、「オトカ山」をとりまくように弧を描くかに思われたが、調査区西側で確認した南北の溝状遺構と合流する可能性の強いことが判明した。これは、北側の上部壁が、北にむかって大きくカーブすることと、溝底もそれと平行して北に向かっていくことも確認したことからである。当初、古墳の周溝ではないかということも考えられたが覆土、走行方向、遺物の点など今回の調査結果から言及することは困難である。今後、継続的な発掘調査による具体的な資料提供が、問題を解明してくれるであろう。

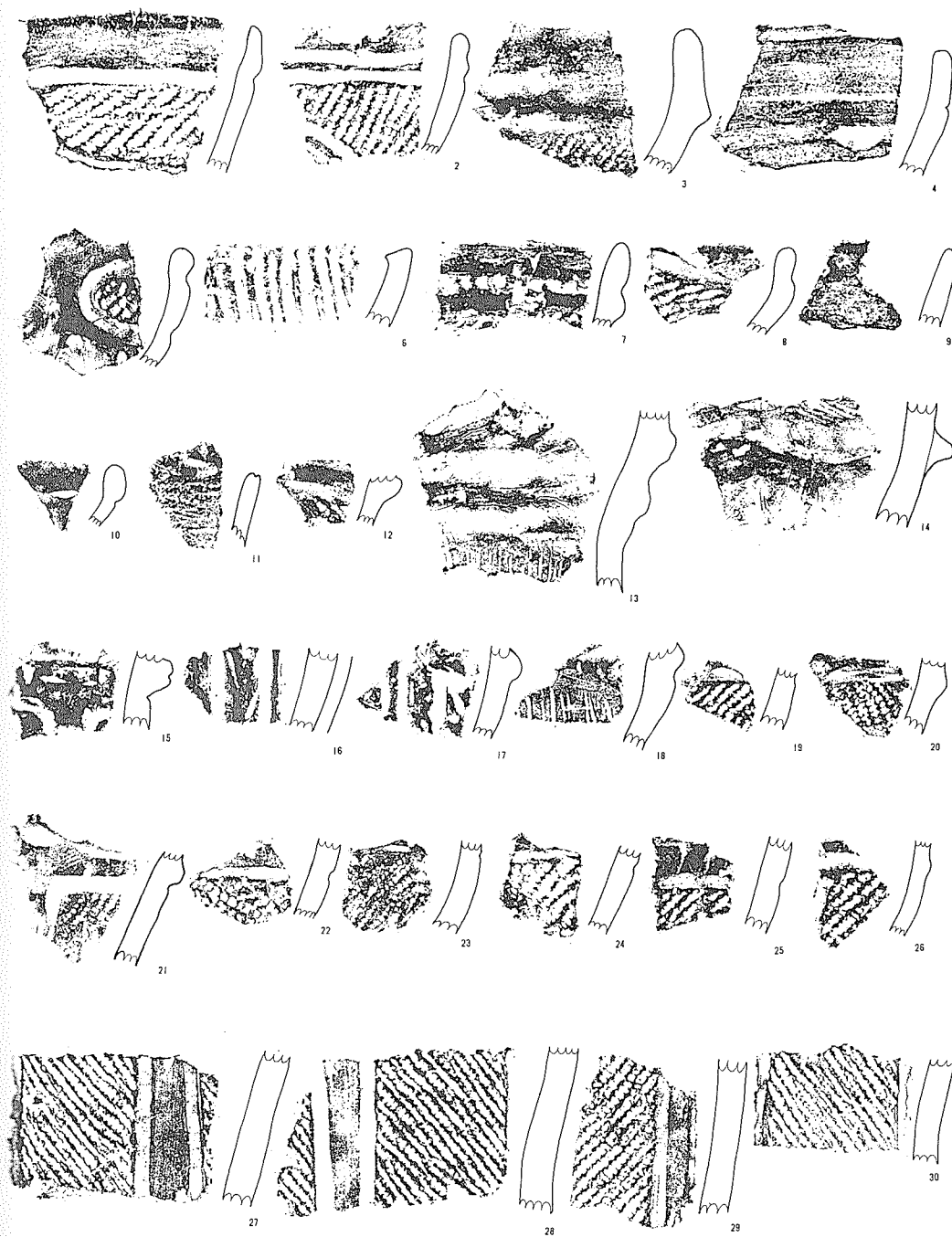
遺物(第16~21図)

溝状遺構より縄文土器、打製石斧、礫、内耳土器、獣骨が出土した。出土状態は投げこまれた状態で南側の中段の溝より出土した。内耳土器は1が器高4.0cm・口径34.0cm、底径33.6cm、最大径36.0cm、2は器高が4.0cmで、口径、底径共に1とほぼ同一の規模と考えられる。内耳土器3個体出土したが、復元可能なものは2個体であった。



第16図 溝状遺構出土遺物1 ($\frac{1}{4}$)

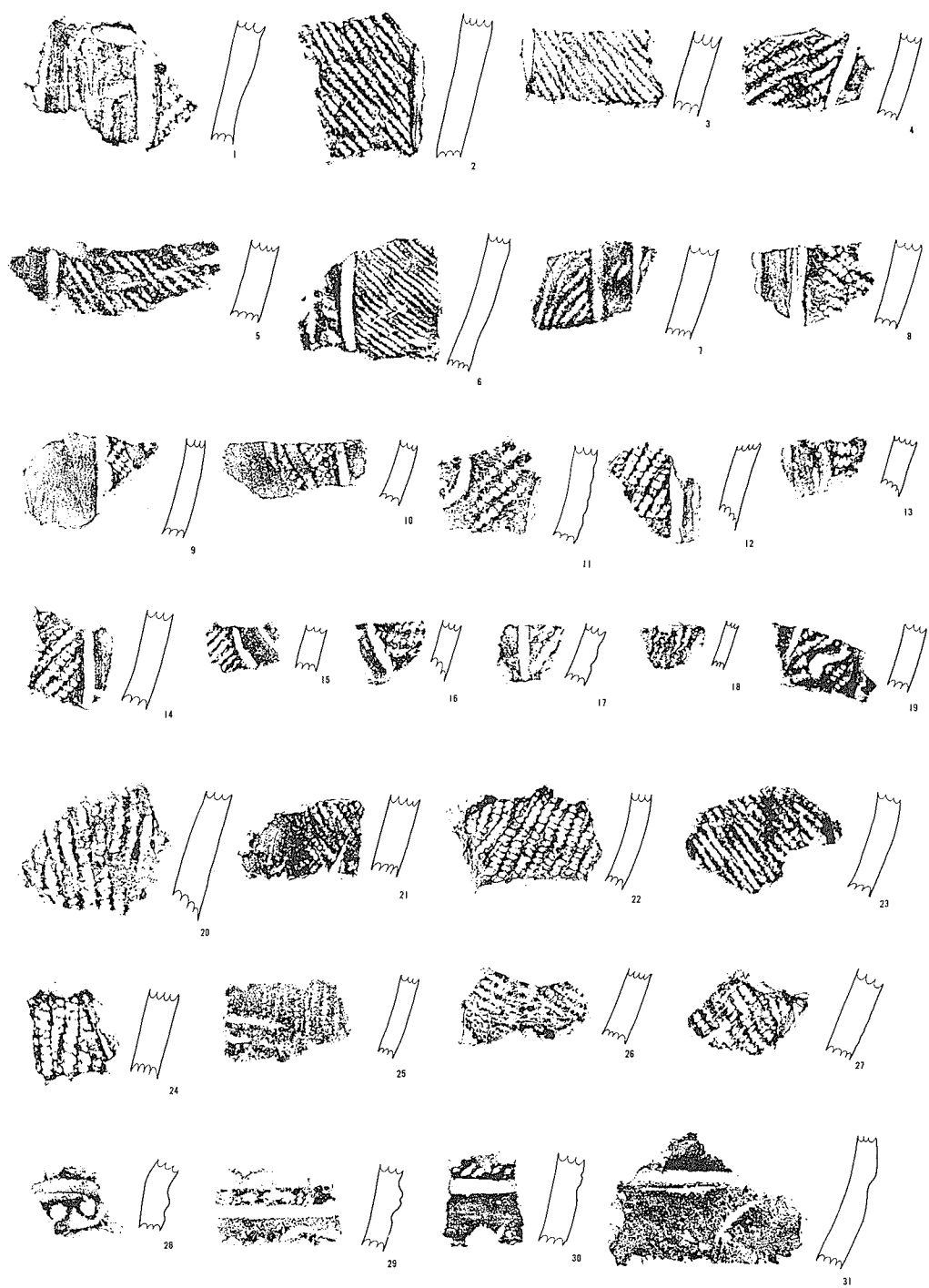
VI 東久保南遺跡第1地点



0 10 cm

第17図 溝状遺構出土遺物2 ($\frac{1}{3}$)

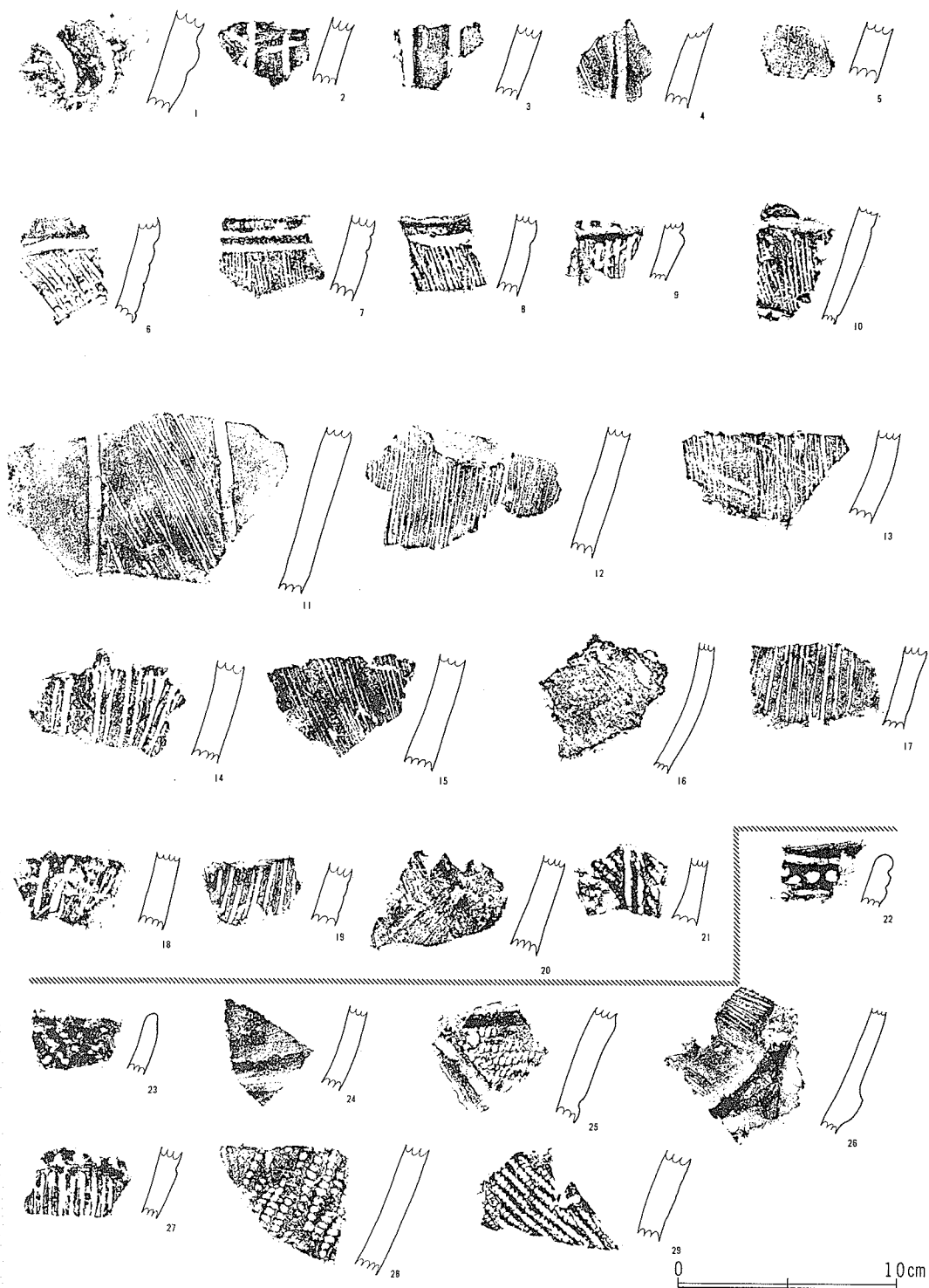
VI 東久保南遺跡第1地点



0 10cm

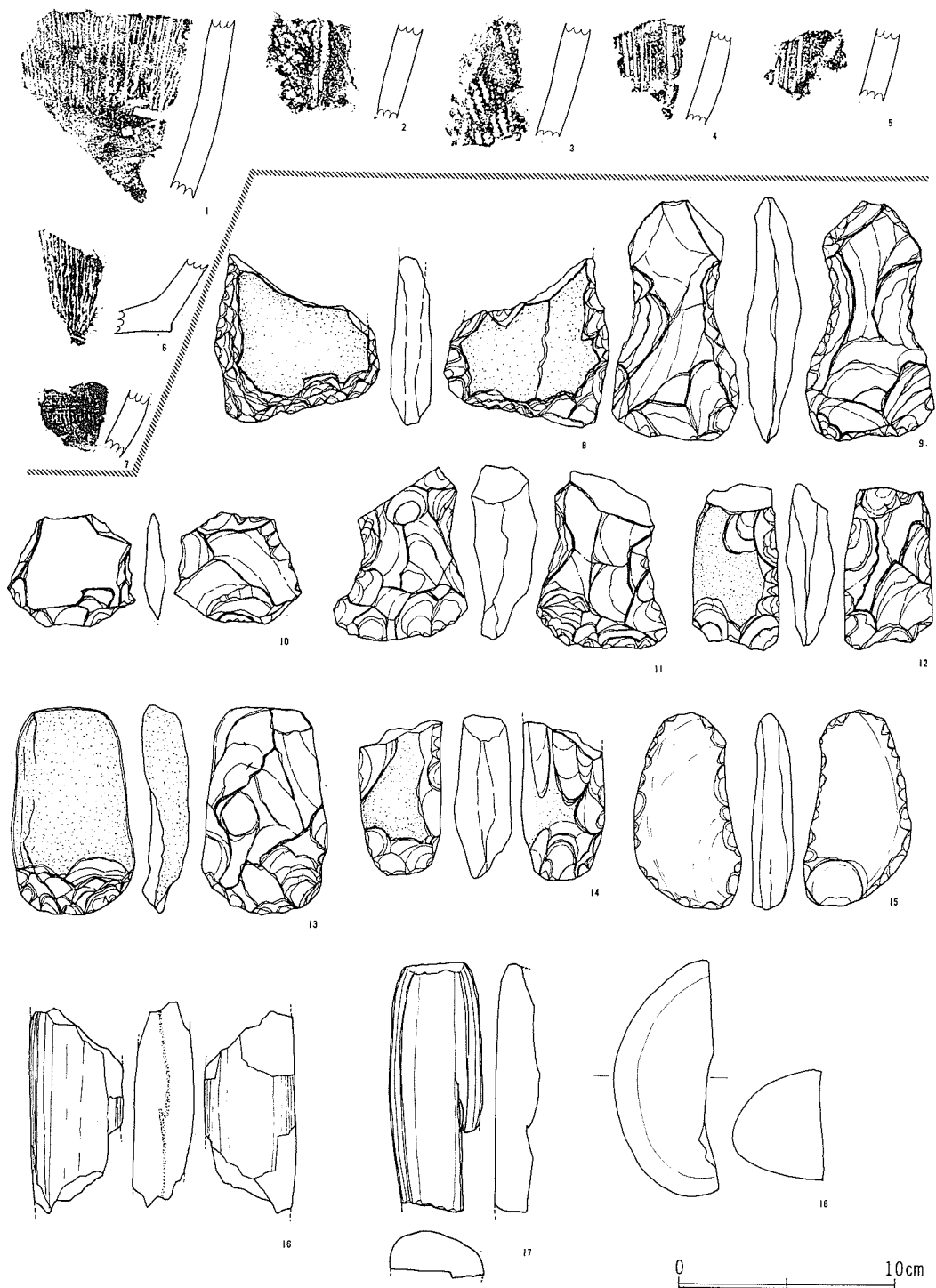
第18図 溝状遺構出土遺物3 ($\frac{1}{3}$)

VI 東久保南遺跡第1地点

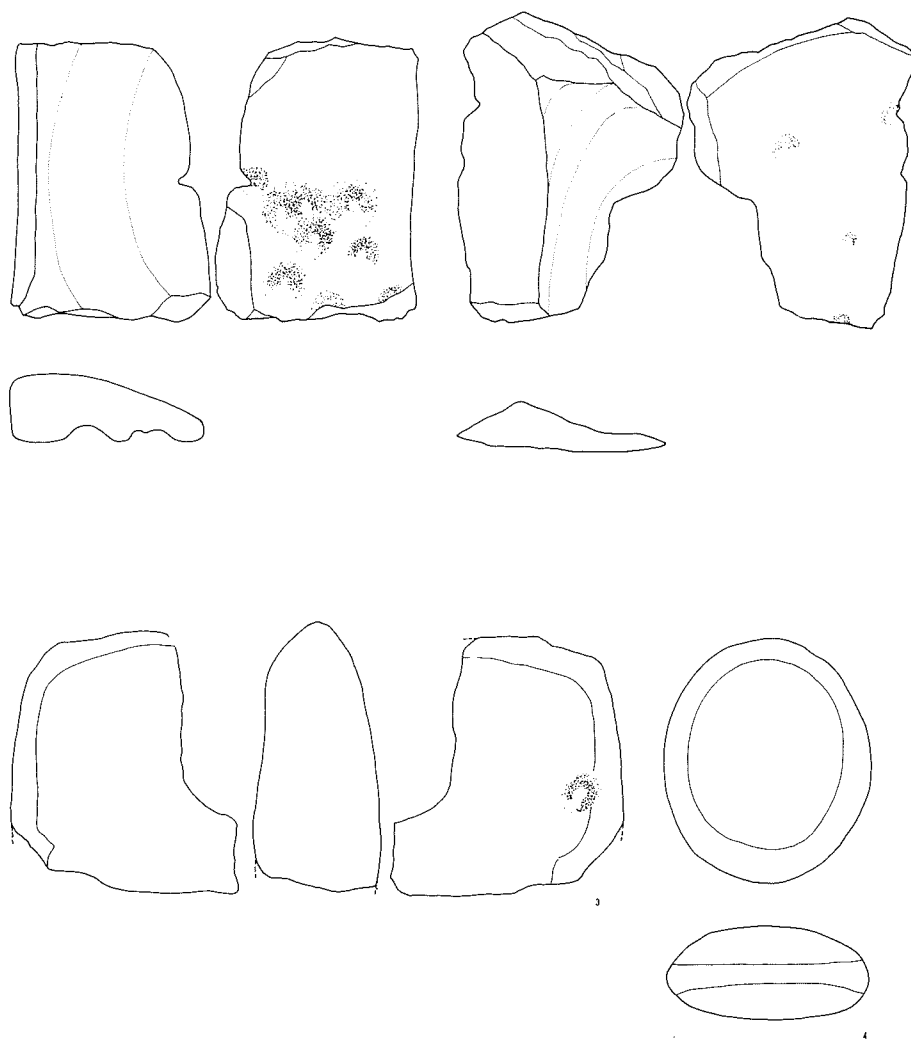


第19図 溝状遺構・包含層出土土器 4 1~21溝状遺構 ($\frac{1}{3}$)
22~29包含層

VI 東久保南遺跡第1地点

第20図 溝状遺構出土遺物5 ($\frac{1}{3}$)

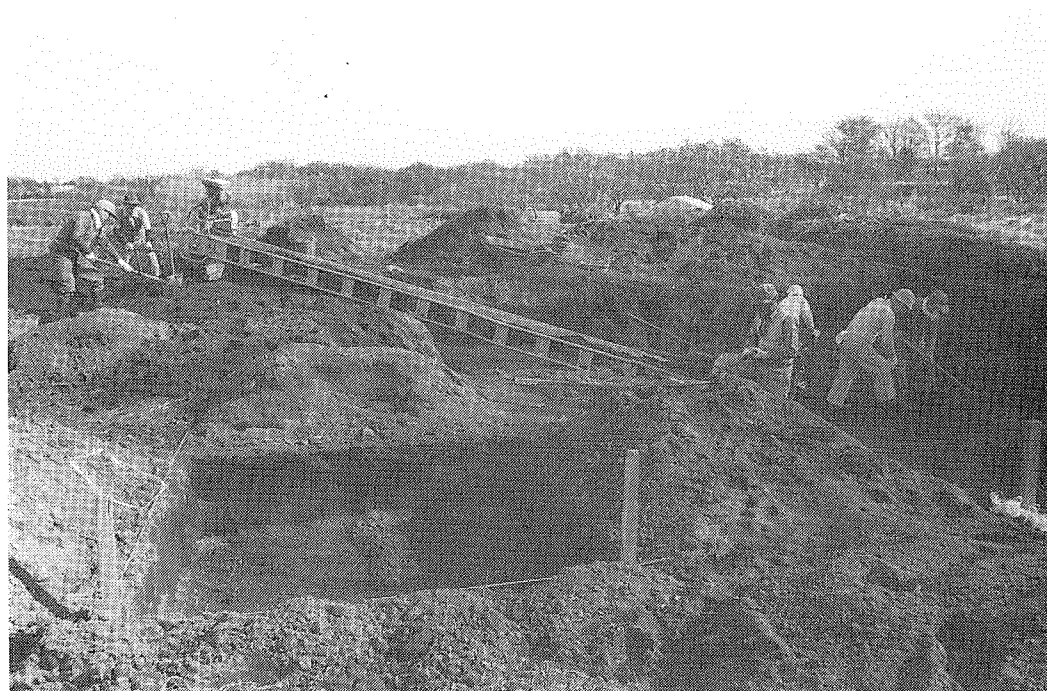
VI 東久保遺跡第1地点

第21図 溝状遺構出土遺物6 ($\frac{1}{3}$)

図版 11 東久保南遺跡第1地点



1. 調査区近景

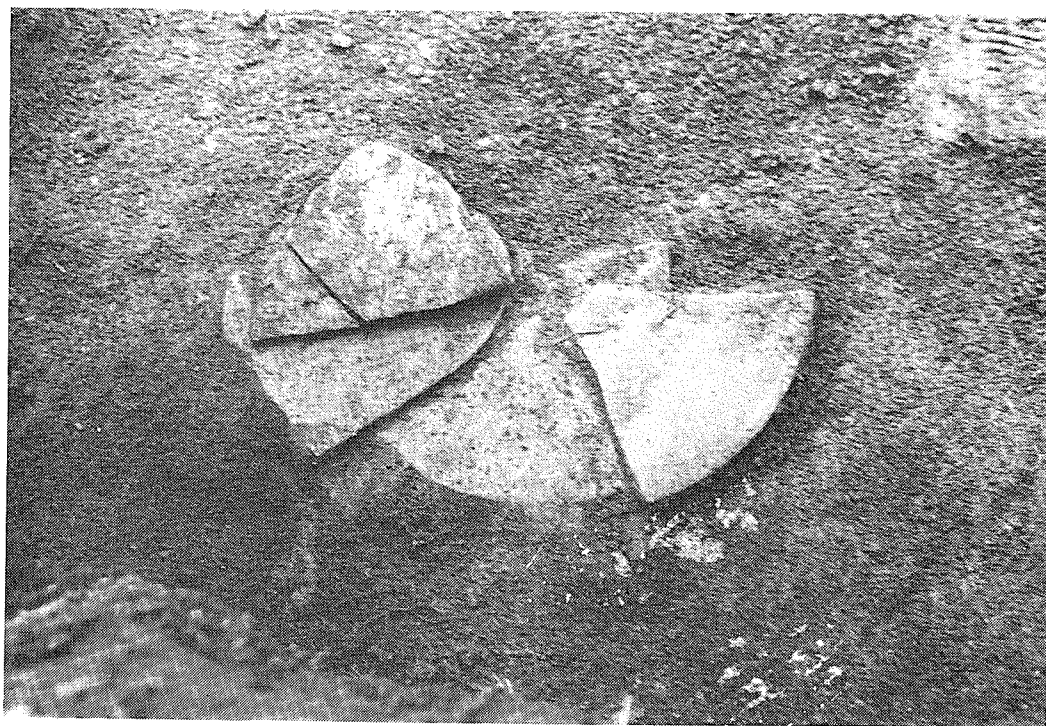


2. 発掘風景

図版 12 東久保南遺跡第 1 地点



1. 発掘風景

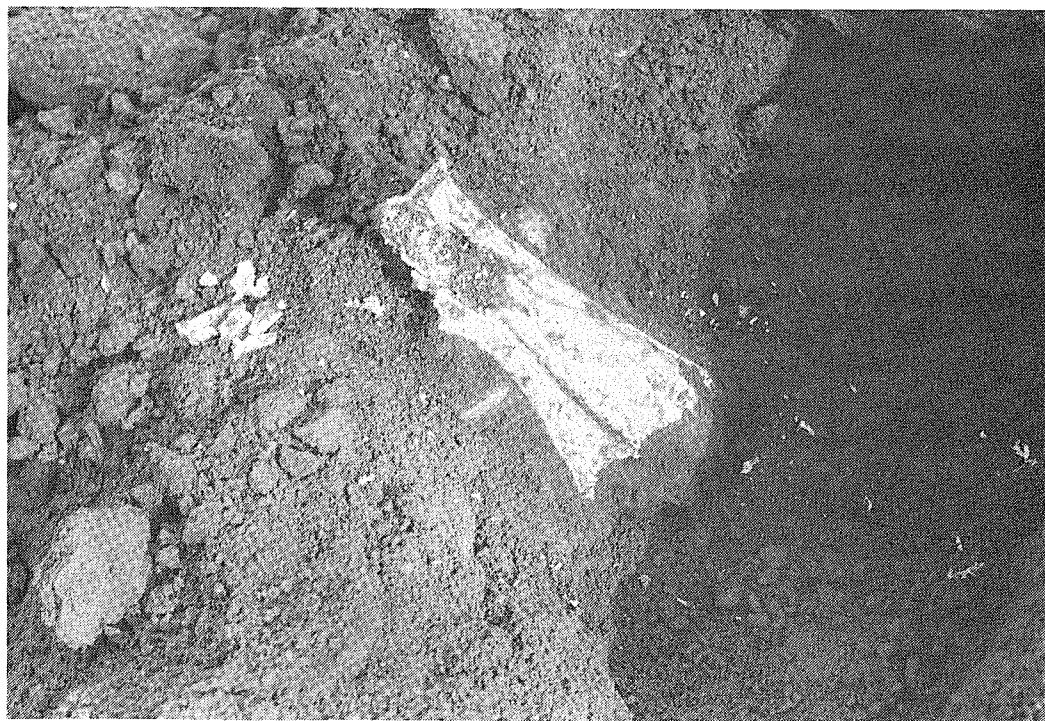


2. 内耳土器出土状態

図版 13 東久保南遺跡第 1 地点



1. 遺物出土状態



2. 獣骨出土状態

図版 14 東久保南遺跡第 1 地点



1. 溝状遺構土層断面



2. 溝状遺構土層断面（西壁）

図版 15 東久保南遺跡第 1 地点



1. 溝状遺構全景（北西から）

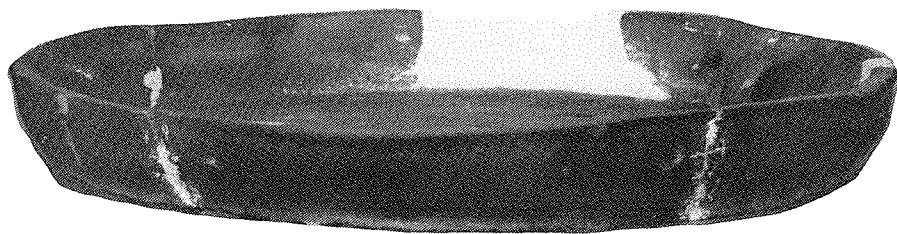


2. 溝状遺構内部

図版 16 東久保南遺跡第 1 地点

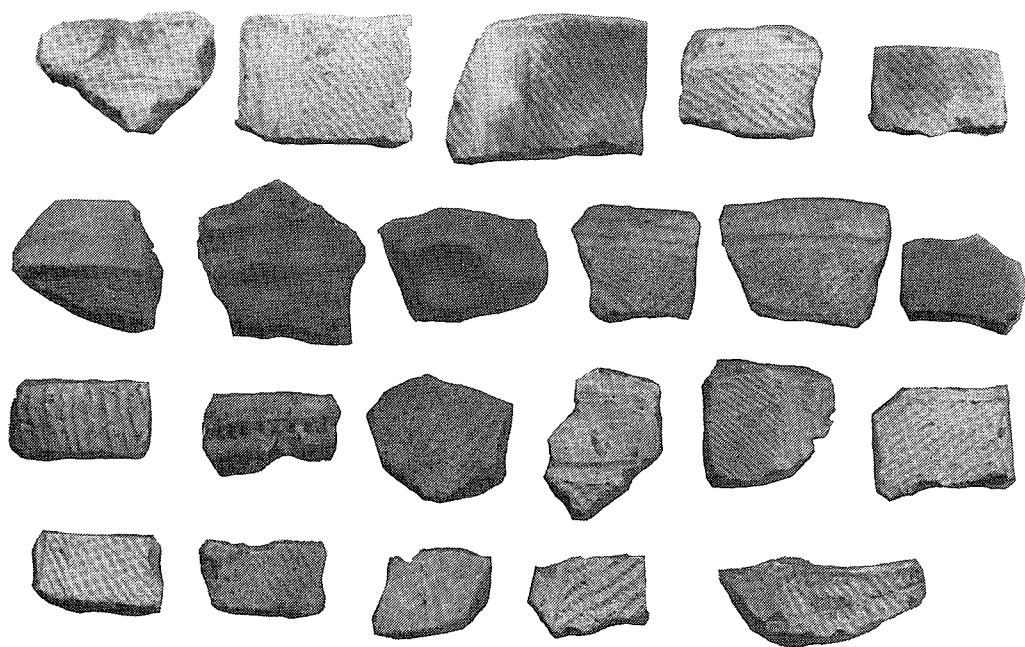


1. 溝状遺構

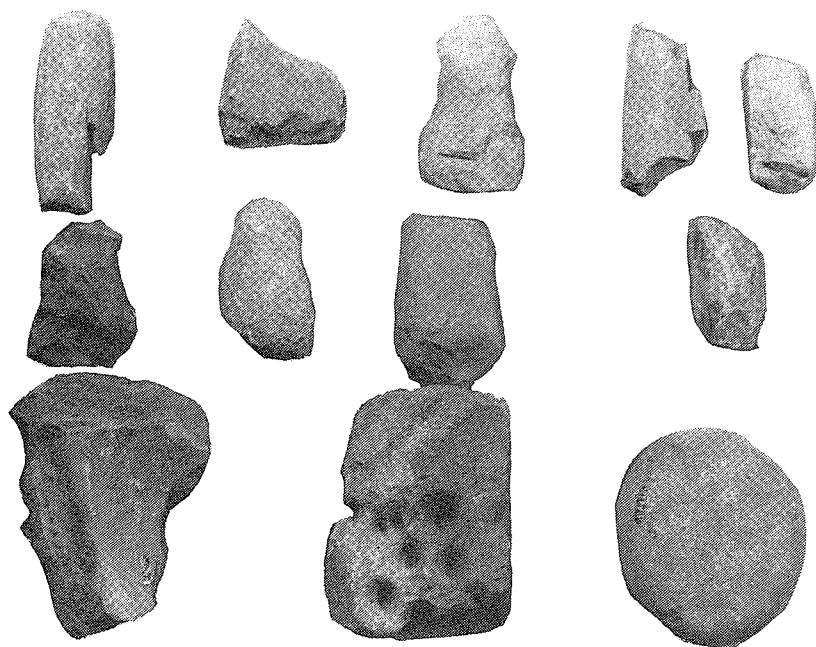


2. 溝状遺構出土土器

図版 17 東久保南遺跡第 1 地点



1. 溝状遺構出土遺物



2. 溝状遺構出土遺物